

初期『中学世界』における〈文学〉の再編成

——「中学Ⅱ世界」への参与と逸脱に関する一考察——

永井聖剛

日本の近代文学の物語コードを「立身出世型」と「反立身出世型」とに区別したのは前田愛（『文学テキスト入門』、一九八八年三月、筑摩書房）であるが、その反立身出世型の主題が文学作品内にたびたび現れるようになるのは、明治三十年代のことである。

「さうだ！ 真の幸福の国は何処にある。」自分は起て、深き思に沈みながら、其処らを彼方此方と歩きはじめた。恰度、昨日の朝、我家の丘で歩るいたやうに大股で。

「真の自由こそ真の幸福ではないか。真の自由は我が如き心に多少の準備ある者が田園の生活を営む事に依て始めて得らるゝのではないか、我に恒産がある。則ち衣食の自由がある。我には読書の嗜好がある、則ち心靈の慰藉がある。我には此自然がある、則ち心と体の牧場がある。」

「凡て此等の者は天が自分に与へた賜物である。何を苦くわむで此賜このたまものを捨て、自から好で都会の生活に此身を投ずるのだ。『事業のため』、『義務を尽さんが為め』、『国民幸福の為め』、『人類の為め』、なるほど実に左うかも知れない。希くは以て自から欺く勿れである。凡て此種の名を以て爾を束縛する勿れである。

「自分は果して少の束縛を感じずして、都会の生活を楽たのしみで居るか。決して左うでない。虚栄の奴隷に非ずんば、奢侈なる遊戯ゴライの使童である。只だ日一日と何者か眼前三尺の先に浮動する処の金色体を逐ひつゝ生活して居るのである。少も落着いて、俯仰して、此天地の生を受用する暇がないではないか、其上ならず、此事に付いては彼人、彼事に付いては此人と、夫れ々々競争すべき人を有し、或は嫉妬し、或は羨み、或は冷笑し、或は崇拜す。見よ、すべて是れ奴隷の心情の狂態ではないか。」
〔国木田独歩「掃去来」、一九〇一「明治三四」年五月、『新小説』〕

立身出世を夢みて上京した青年が、盲目的な功名心に突き動かされた幾年かの都会生活を経て、いつしか「虚栄の奴隷」と化している自分にはたとえ何れも、何よりも大切なものは、名誉や栄達などではなく、内面的な「真の自由」であるという境地に至り、都会以外の地に自分の居場所を求める。この境地までに至る履歴と、都会を離れるまでの煩悶・葛藤と、新たに得た理想を実際につかむことの困難とが、これらの作品の主たるモチーフとなるだろう。

もちろん、「都会から地方へ」「立身出世から内面的自由へ」という脱中心的な指向性を見せる「反立身出世型」という主題は、宮崎湖処子『帰郷』（一八九〇「明治三三」年六月、民友社）の成功や、政治青年としての理想に破れて「内部生命」の崇高を説くに至った北村透谷（「内部生命論」、一八九三「明治二六」年五月、『文学界』）の人生そのものを見てもわかるように、必ずしも新しいものではない（明治三五年前後には、煩悶青年が帰るべき理想郷など存在しないのだという認識のパラダイムに移行しているとする指摘もある¹）。ただし、小稿が明治三十年代にこだわるのは、こうした主題が、ある突出した個性のなせる営為としてではなく、より一般的で、かつ容易に共鳴可能な心性、いわばこの時代の主たる主題として表出され得るような段階が、この明治三十年代に確認できるからにはかならない。本稿は、そのサンプルとして『中学世界』（一八九八年九月〜一九三〇年五月、博文館）を用いたいと思う。どうしてこの雑誌なのかは、追って明らかにしていきたい。

さて、次に引用するのは、明治三十五年の『中学世界』「青年文壇」欄に掲載された一中学生の投書文である。

嗚呼自分は、なぜ山は青く、水は清き、小天地の幽邃な楽土を捨て、塵の都会に来て、斯様な荒浪にもまれるのであらう、自分ながら其の判断に、苦しむのである。（中略）幼なひ時のことを思ひ廻して見れば、弟と二人梅咲く小川に、小船を浮かべたことや、心地よき夕風に袂を翻して、友と二人螢を追つたり、又紙の帽子におもちやの鉄砲を持つて、兵隊の真似をしたことや、或は慈愛の母上が、自分の頭を撫てつゝまさきくあれと、おゝせられしことやらが、胸に交々と浮んできて、どうしてもたまらない、ために自分は、故郷へ立ち帰ろうと思ふたことが、度々であつたがまだ何の得る所もなしに、何の面目があつて故郷へ帰り、父母や友人に見えることが出来様か、実に自分はそれが忍びのである、為に自分は心を取りなをして、唯すら忍耐の二字を守り、幾たびか浮世の荒浪と戦ふたが、運のつきか刀は折れ、矢はつきて、征衣もしどろに進退茲に谷まつたのである、此に於て自分は、もう詮方がなひ断然耻を呑んで帰ろう、苦学をして立派な人となつた処が何んだ、貴い官位に昇つた所が何んだ、富貴や功名や、名誉や、どうするものだ、つまる所は北郎山下一片の烟と化すのみだ、嗚呼自分は、けがれた人々の中に交つて、同じやうに魔道を歩ひていた残念さ口惜さ。（田内壽月「なつかしき故郷」、一九〇二「明治三五年六月」『中学世界』五七）

ロマンチックな感傷といつてしまえばそれまでだが、盲目的な立身出世主義への没入の反省が促した「内面の発見」は、やがて、明治三十年代末の国木田独歩再評価と踵を接する自然主義文学の成立と流行（この直系は正宗白鳥であろう）の基盤となり、さらにそれは、夏目漱石が描く高等遊民たち、また白樺派の若者たちへと連なる水脈をもかたどつてゆくだろう。

この引用文について、もうひとつ重要な点を指摘しておきたい。それは、現実逃避、無限なものへのあこがれ、内面感情の優位性といった、ロマンチズムの典型的な要素を兼ね揃えたこうした傾向が、少なくとも明治三十年代の『中学世界』においては「ロマンチズム」と呼ばれなかつたことだ。このあと確認するように。それらは「厭世的」と呼ばれ、「個人主義」と呼ばれ、また、個人の感情や欲望を率直に述べているということでも「写実主義」とさえ呼ばれた。もちろん、これらのレッテルはいずれも否定的な評価とともに用いられたわけであるが、大事なものは、このような分節の意味付けにこそ、明治三十年代の中学生たちにおける「書くこと」をめぐる情況が色濃く滲み出ているということである。

二

次の引用は、『中学世界』創刊号（一八九八「明治三二」年九月）の投書欄「青年文壇」の、記念すべき第一席に選出された文章である。ある人物が述べたという「懦弱は人の本性なり」という主張に対する反駁として書かれたものだが、ここには、初期『中学世界』「青年文壇」欄への投書が

備えている特徴の多くを見て取ることができる。まずはそれを確認しておこう。

人の人性は懦弱なる乎、將た勤勉なる乎。頃日或論者、説を為して曰く。勤勉は限有り、懦弱は限なし、他よりは励ますなり、己よりは奮ふなり。何ものか附加するにあらざるよりは、人は勤勉なる能はず。懦弱は人の本性なりと。是れ果して真理なるや否や、請ふ予輩をして少しく所論を吐かしめよ。

予輩は思ふ、此断案に於て、論者の見地は、人間を或意識ある高等動物としてよりは、寧ろ無意識なる下等動物としての地位に置き、人生を樂天的として觀たるよりは、寧ろ厭世的として眇見したるもの、畢竟靈活なる人間を蔑如したるの言たるに過ぎず。其「勤勉は限有り、懦弱は限なし」とは如何なる意ぞ。顧ふに勤勉も懦弱も一種の習慣的勢力なり。一は高上の理想に向ひ、一は劣等の肉欲に向ふ、共に反対の勢力を以て上下に拡大す。而して此勢力は、俱に制限あり、法規あり、一定の範圍内を超越する能はず、何となれば、人生は既に有限的動物にして、其意思及び動作は、常に待対界の有限、自由に止まり、一步も絶対界の無限、自由に踏み出す事能はず。是に於て、勤勉も懦弱も、俱に待対的にして、其窮極点に至らば、個人身体の廢滅と相一致す、豈勤勉には制限ありて、懦弱には無制限なるの理あらんや。（細谷馨峰「人の人性は懦弱なる乎、將た勤勉なる乎」）

初期『中学世界』「青年文壇」欄への投書文に特徴的な傾向として、まず指摘できるのは、①『学問のすゝめ』『西国立志編』的な、自己規律化セルフ・ヘルプの重要性を訴えている、ということである。また、同じ投書文からの次の引用からは、②「小説」を「惰弱」と結びつけようとする傾向も見取れるはずだ。③漢文書き下し体（当時の言葉では「普通文」「今体文」）で綴られている、という第三の特徴とともに確認しておきたい。

哲学は常に宇宙の活動を説き、人生も亦た其進歩的活動体の一分子なる事を教へ、其進歩発達は無意識に器械的に妄信するにあらずして、必ずや意識的に、一定の目的を指しつつ、高上に向て活動し、吾人をして、漸次靈妙なる神的美域に近づかしめんと欲す。是れ現今多数の学者の等しく許す処なり。是に於て乎、吾人の本性は、此原理に伴うて、単純より複雑に、小説的より数理的に、従て惰弱的より勤勉的に進歩せざる可からず。（中略）此等の社会、及び時代の原動力を問へば、則ち個人の精神と形体とに帰し、此個人的先天性の、益々高上に向はんとする理想を有するは、日夜汲々として努力する、勤勉的動物たるの故に依らずんばあらず。是れ予輩の主観的に、人の本性は勤勉なりと論断する所以なり。（「人の人性は惰弱なる乎、將た勤勉なる乎」）

では先に挙げた①②③の三つの特徴のうち、初期『中学世界』投書文における「自己規律化」の問題から詳しく見ていくことにしよう。

中学生たちの投書に見られる「勤勉／惰弱」という二項対立、そして、それを乗り越えるための自己規律重視の姿勢は、たとえば、『西国立志編』の「何等ノ芸業ニ限ラズ、ソノ絶妙極美ノ地位ハ、懶惰ナル人ノ能達スル所ニ非ズ、人ヲシテ富饒ナラシムルモノハ他ナシ、勤勉ノ手、勤勉ノ心ノミ」（第一編「二十四」）や、「内自助テ為トコロノ事ハ、必ず生長シテ禦ベカラザルノ勢アリ」（第二編「二」）といった訴えに合致するものだ。また、学者の役割の重要性を説くくだりは、『学問のすゝめ』の第四編「学者の識分を論ず」を思い起こさせもする。

また、次の投書文「先づ一身の為に計れ」は、福沢諭吉のこれまた有名なテーゼ「一身独立して、一国独立すること」を、ほぼそのまま祖述したような投書文である。

国家は一己人より成るものなり、見よ見よ、一人集りて一家を成し、一家集りて村を成し、一郡を成し、遂に一国を成すに至るを、故に国家の富強なるものは一個人の富強及集合せるものなり、一個人の利益は則国家の利益なり、彼の農夫が孜孜汲々として、春蒔秋穫に従事する所以のものは、即ち一身一家の、食料を造出し、有余は之を売りて金銭を得んか、為めにして、自ら利することには相違なきも、国家の上より之を觀れば、彼等は人類の食物を製出する、大功労者にして国家の利益をなしつゝあるものなり、（荏田権三「先づ一身の為に計れ」、一八九九「明治三二」年六月、『中学世界』二二二）

いま、「一身独立して、一国独立すること」との類縁性について述べたが、井上哲次郎『勅語衍義』³⁾の影響についても触れておくべきだろう。というのも、「一身の独立」に重きをおき、「一家が一国の大本」と力説した福沢に対し、先の引用に感じられるのは、むしろ「国家の利益」への全面的な自己譲渡の意思表示のように感じられるからだ。

『勅語衍義』は「国君ノ臣民ニ於ケル、猶ホ父母ノ子孫ニ於ケル如シ、即チ一国ハ一家ヲ拡充セルモノ」であると説いた。家内で親の言うことをきくように、国内で「臣民」は天皇の言うことをきかなければならぬ。いっぽうこの投書家は、「一個人の利益は則国家の利益なり」と書いている。素直に解釈すれば、自己を惜しみなく国家に譲渡する、というわけだ。もちろんこの倒錯的ともいうべき身振りは虚構的なものである。しかしそれにしても、いわゆる自己形成の過程にあるはずの彼らにとつて、この虚構化はそれほど自明かつ容易なことなのだろうか。自己譲渡の欲望は、いったいどこに向けられているだろうか。

こう考えるべきだろう。「一個人の利益は則国家の利益なり」と記述することによって、この投書家は、複雑で茫漠とした、ときには暴力的でさえある「国家」を、単純化・透明化しようとしているのではないか。この一身を惜しみなく国家に譲渡する、という常套句を生産し続けることによって、彼らは国家を想像的に所有（共有）し、それを通じて「主体Ⅱ臣」となろうとしたのである。

さて、これまで見てきたような傾向からは、『中学世界』の投書家たち

が、これよりもひと時代前の投書雑誌『穎才新誌』の投書家たちと同じような自己鍛錬を、〈書くこと〉を通じて行なっていたのだということを知解することができる。国家への全面的な自己譲渡の欲望がここにも見出せることも、あわせて確認しておこう。

目的達スレバ富貴トナリ目的達セザレバ貧人トナルハ是元ヨリ常道ナリ抑々人ニ肝要ナル物ハ即チ各人ノ目的ニシテ其目的ニ自然高上ト不高上ノ二種アリ如何ナル名門貴族ニ生ズル人タリトモ幼時ヨリ目的ヲ不高上ニシテ怠惰ナレバ老歳ニ至テ貧窮不測ノ困苦ヲ生ズレバ遂ニ又盜賊ノ如キ悪ニ陥入ルコト必セリ豈ニ実ニ戒ム可キニ非ズヤ然リ而シテ貧家ニ生ズル人ト雖モ少時ヨリ目的ヲ高上ニシテ勉勵セバ老年ニ至テ富有貴顕ノ人トナルヤ実ニ疑ヲ容レザル所ナリ故ニ百事悉ク目的ヲ高上ニシテ膽ハ大ナラズンバ有ル可ラズ徒ニ小心ヲ以テ貧家ニ陥半ル等実ニ国ノ大恥ニアラズヤ依テ能ク勉勵シテ賢人トナリ以テ其英名ヲ宇内ニ轟カスヤ真ニ其国ノ勲功トナル可シ嗚呼勉メザラン哉（野中象次郎「目的の高上ニスベキ説」、一八七九〔明治一二年〕二月二日、『穎才新誌』）

前田愛や竹内洋の指摘するところによれば、『学問のすゝめ』や『西国立志編』に立身出世の教義を読み取り、さらに〈書くこと〉を通じて精神形成をおこなうような共通体験が、『穎才新誌』という場で行われて

いた。竹内はこのように述べる。「穎才新誌」の作文は少し読めばすぐわかるように、その多くは『学問のすゝめ』や学制序文あるいは『西国立志編』（明治四年）の影響をうけたものである。影響をうけたというよりも、これらの言説のコピーといつてもいいものがほとんどである。（中略）『穎才新誌』の青少年たちは、『学問のすゝめ』や『西国立志編』によって野心を大いに加熱され、加熱された野心を「穎才新誌」の作文に託した。さらに雑誌のメガフォン効果によって野心の加熱が拡大再生産されていった。立身出世のエトスの内面化の過程は、作文する行為そのものの中に含まれていたのである。この場合の「作文」は、自然主義以降の作文で重んじられたような、見たこと聞いたこと感じたことをありのまま文章に定着させようとする作文とは様相を異にし、『穎才新誌』や各種作文書に掲載された作文を模範作文として読み、そこに選ばれている作文を鏡とし、自己をそれに同一化させようとする行為にほかならないのであった。

なお、彼らの作文の具体的な様相については、斎藤希史による詳細な考察もある。⁶⁾『穎才新誌』誌上における紋切型の氾濫を、『学問のすゝめ』や『西国立志編』といった起源に求めるのではなく、むしろ、『^必維明治文鑑』や『^概習文軌範』などの普通文（今本文）による模範文例集類の普及に求めた。『教場と投稿雑誌と作文書との間で数多の作文が往復し、作例を増やし、題目を揃えてい』く過程で、紋切型の文体と立身出世の言説とが切り離しがたく結びついたのである。そしてそ

れは、「今本文（明治普通文）普及のメカニズム」そのものでもあった。

三

では次に、初期『中学世界』投書文における「文学嫌い」について検討することにしよう。『中学世界』の創刊号の「青年文壇」欄には、次のような投書も選ばれている。

或者はいふ。文学は旺盛なる品性を消磨せしめて、繊弱ならしめ、凍乎たる感慨を抑へて、萎靡振はさらしむと、これ蓋し耽溺の結果のみ、豈に文学其物の罪なりとせんや、／＼文学の思想は、実に人をして豪壮ならしめ、俊烈ならしむ、見よ徳川の末世、天下麻の如く乱れ、举世暗弱、士氣銷沈、志士をして、轉た涙に咽はしむ、此の時に当り、唾手一番、起て人物時代の大題目を誦ひ、頑夢を攪破し、士氣を鼓吹したるは、是れ豈に藤湖、山陽の輩ならずや、周室衰へて、諸侯相争ひ、天下紛糾、亦道義の何たるかを解せざるなり、此の時に当り、奮然蹶起、侃々道義を説き、社会の木鐸となり人世を導きたるは、是れ豈に孔夫子ならずや、然り彼等は実に豪壮なる感慨を有したりき、俊烈なる心志を有したりき、此の俊烈なるの心志、豪壮なるの感慨是れ豈に文学思想の賜なりと知らずや、觀し去り、觀し来れば、文学思想の人世に於ける効能亦大なりといふべし。（浅香四有三「文学思想」、一八九八「明治三二」年九月、『中学世界』一一一）

ここには「文学」の果たすべき役割とその効能が、声高に語られている。ただし、それは「文学」が「人をして豪壮ならしめ、俊烈ならしむ」ものである限りにおいてであり、いわゆる「文士」の手による小説や風流詩文などはその埒外にあるものとされていることに注意しよう。「それ世事紛々、举世暗濁、百事世と違ふ、則ち去て松風蘿月に吟し、悶を遣り、鬱を慰め、悠々として超然世外に屹立す、何等の高雅そや」。

筆者の立場は明瞭である。人々の「英気を鼓舞し」、「奮励の道を知らしむ」人物だけが、真の文学者なのである。これが、「稗官小説ハ、人ノ戯笑ニ供シ、ソノ心志ヲ蕩散スルモノニシテ、教養ノ事ヲ穢コト、コレヨリ 甚 ハナシ」という『西国立志編』（第十一編二十四「稗官小説の弊」）の、経世済民的な立場と通じ合う思想であることは一目瞭然である。投書家らの「文学嫌い」は、「今世ニ、カクノ如キ書ヲ著スモノアリテ、時人ノ好ニ投ゼント欲シ、卑俗ヲ嫌ズ諧謔ヲ避ズ、人倫ノ法ヲ破リ、上帝ノ律ヲ慢ルコト、真ニ厭悪ベキナリ」（同）というときの「厭悪」と合致する。「人倫ノ法」「上帝ノ律」への絶えざる配慮が、文学無用論を叫ばせるのである。

柳田泉の整理するところによれば、漢文学・西洋美学・風流詩文からなる「上の文学」と、戯作・戯曲・俳諧・随筆・雑録などからなる「下の文学」という近世以来の対立構図は、明治の世になり、その美学的傾向によって「上の文学」から風流詩文が排除されつつ変形してゆく。耳を傾けておくべきなのは、「もともと、詩文は浮文遊詞とはいっても、本

来からいえば、詩教をもととしたもので、実学とは無縁ではなかった」という指摘である。詩文の排除、それは「名目は実学奨励であるが、実は封建組織、武家制度に邪魔な学問の自由討究の禁止」であり、一方では「同じ詩文でも言志と諷諭の諸作は、本来文学理想の元祖である詩教につながるころがあるから、これは許された。文学無用と文学有用との間の境界線の引き直しが行なわれたのである」。

時間的にやや隔たりはあるものの、創刊間もない『中学世界』誌上で起こっていた現象も、その基本はやはり、実学的な尺度から、中学生たちにとつてあるべき「文学」を再編成しようとする動きにほかならなかったといえるだろう（だから、正確にいえばそれは「文学嫌い」ではない。広義の「文学」と狭義の「文学」との認識の相違といふべきものである）。ちなみに、投書家たちに多大な影響を与えた福沢諭吉自身は、反儒教的な立場を貫いた思想家であるが（丸山真男によれば、その一つのピークは明治三十年代のことである）、すでに見てきたように、中学生たちの素朴な実学指向は経世の志は、実学と儒教との分別という意識を持たなかった。

私たちは、つい「投書青年」イコール「文学青年」と安直に結びつけがちである（とくに、二十世紀の側から過去を振り返ったときに、そうした傾向が強い）が、『中学世界』の「青年文壇」欄という（文壇）が認めるところの「文学」が以上のようなものであったことについては、おおいに注意されるべきであろう。『中学世界』が「投書雑誌」だからといって、そこに集った者たちが「文学青年」であるわけではないのだ。事実、こ

の「中学^{メトリックラシ}世界」に〈書くこと〉によって参与していた青年たちは「文学」（いわゆる軟文学）を嫌悪さえしていた。先の投書家・浅香四有^三によれば、いわゆる風流詩文に親しむ者は、「一度逆境に沈淪するや、意気沮喪、悲嘆絶望、一蹶亦起つ能はず、悲歌に終り、千古に眠るの醜態を演ずるに至る」しかない、「古人の糟粕を嘗めて得々傲るの痴漢」にすぎないのであつて、この「痴漢」は、とうてい「真の文学」の担い手とはいえないのであつた。

同じく日清戦後期の代表的な投書雑誌『文庫』と比較してみれば、いま述べたような『中学世界』の反動的傾向はよりクリアに浮かび上がってくる。なるほど『文庫』においても、「小説を作り、新体詩を作る、余力ありて之をなすは、吾人之を咎めず、唯青年有為の材を抱いて、有為の日時を含英阻華の工夫に費すが如きは、吾人の興せざる所也」（田岡嶺雲「孤憤危言」、一八九八〔明治三二〕年三月）であるとか、「吾人は今の所謂新進作家に望むものは、作にあらず、世故にあらず、唯夫れ学識の修養のみにあるなり」（齊藤澹影「新進作家」、一八九八〔明治三二〕年三月）といった「文学」への苦言や批判はあちこちに散見される。ただし、毎号の誌面すべてが投書で埋められる雑誌『文庫』にとつて、「文学趣味」それ自体を否定し去ることは、自己否定以外の何ものでもなく、それはとうてい不可能なことである。『文庫』では、中学生たちにおける〈書くこと〉の自明性はほとんど疑われることはなかつたといつてよい。

これと比較すると、『中学世界』における「文学嫌い」の傾向、あるいは

は〈書くこと〉の目的や意義をめぐる自問は、かなり厳しいものであつたことが理解される。その典型的な例を、初期『中学世界』からもういくつか拾つてみよう。

隋唐の艶飾文辞、及び仏教の感化侵入せしより、文学の勢一変して軟弱纖麗となり、晏居逸楽其良心をして、極めて浅薄なる、最も偏僻なる、性情の発作に止まらしめ、一種厭世的悲觀的の傾向を生じ、奥山に鳴く鹿の声を聞きては、恋愛の情に感じ、立田の川に散りゆく紅葉を見ては、人性の逝て還らざるを忍び、須磨の浦風難波の蘆荻、一として涙痕悲哀の媒とならざるなく、花に対しては泣き、月に対しては泣き、紅顔は白骨を悲しみ、緑髪は霜鬢を歎し、国民は手を携へて涙の谷に陥れり。（山川八郎「随感漫筆」、一八九八〔明治三二〕年一月、『中学世界』一七）

ここには、和文脈的な「軟弱纖麗」な心性へのあからさまな批判あるいは嫌悪が示されている。次の引用にも顕著にあらわれているように、彼らにとつて、「大望の猛志」を有さない同世代の青年の存在それ自体が許しがたいのだ。

現今の青少年たるもの一般に大望の猛志なく活大の気力なく只汲々として小事に醒醒し不遇を嘆じ失望落胆の中に終るものゝ如し而して現

青少年の希ふ所は区々たる私欲を欲するにあり難苦の桎梏を免れたきにあり然るに其欲する私欲を求むる能はざると桎梏の苦艱に困る、
 結 不愉快の人となり落胆の人となり百千のうらみを天に訴ふるに
 到る／諸子よ乞ふ炯々たる眼光を放て古今の英雄俊傑の伝記を読め
 (平澤内記「落胆する勿れ」、一八九九「明治三二年七月」『中学世界』二一六)

「落胆する勿れ」という叱咤は、この時期すでに顕在化していた煩悶青年たちに向けられたものだ(煩悶することが「私欲」の現れであると指摘されていることに注意)。さきほど、志士たちの気概を鼓舞した藤田東湖や頼山陽らの漢文の価値を力説した投書を参照したが(浅香四有三「文学思想」、同世代の中学生たちに対して「炯々たる眼光を放て古今の英雄俊傑の伝記を読め」と呼びかけるこの投書者のいらだちも、それと同質の問題意識から発されたものであるといえよう(一八九三「明治二六」年一月の山路愛山「頼襄を論ず」に端を発する、北村透谷との「人生相渉論争」が、明治三十年代の『中学世界』誌上で再現されているものと思えば、わかりやすい)。要するに彼らは、おのれの行動の指針として『日本外史』などに書かれた勇猛な尊王志士たちの精神を常に参照せよと訴えているわけだが、これから見て行くように、こうした思考は、漢文脈的な士人的エトスの典型的な発露というべきものである。以下、『中学世界』投書文が「漢文書き下し体で綴られていること」あるいは、投書文が「漢文脈」の水脈下にあることの意味について考えてみたい。

四

ここでいう「漢文脈」とは、「漢詩文そのものだけでなく、そこから生み出された、漢文調と言われる文体も含める」もので、「漢字を使うことはもとより、漢詩や故事成語を引いたり、訓読調のことば遣いをしてみたりする」こと、また、そのことによつて「思考や感覚の型」を身体化する¹¹⁾こと、これらを包括した概念である。

漢文を読み書きする行為が公的な素養として認識されるきっかけは、一七九〇(寛政二)年、松平定信による異学の禁であるという。このとき、朱子学が正統な学問になり、昌平坂学問所が開設されたわけだが、そこでは、中国の官吏登用試験である科挙を参照した「学問吟味」およびその初学向けの「素読吟味」という試験が行われ、これによつて、幕府による教育Ⅱ登用システムが確立。その後、漢文を読み書きする行為が藩校を通じて全国に広まった。十八世紀から十九世紀にかけてのことである。

漢文素読などによつて、その思考や感覚の型を形成した者たちが身につけたものとは何だったのか。それは「士大夫の思考や感覚の型」、すなわち「士人的エトス」である。

寛政以降の教化政策によつて、学問は士族が身を立てるために必須の要件となりました。政治との通路は武藝ではなく学問によつて開かれたのです。(中略)もう一つ、教化のための儒学はまず修身に始まるわ

けですが、それが治国・平天下に連なっていることも、確認しておきましよう。つまり、統治への意識ということです。士大夫の自己認識の重要な側面がここにあることは、言うまでもありません。武將とその家来たちもまた、その意識を分かちもつことで、士となったのです。経世の志と言い換えることもできるでしょう。(中略) 当の学生たちにとつてみれば、漢文で読み書きするという世界がまず目の前にあり、そこには日常の言語とは異なる文脈があったことこそが重要なのです。そしてそれは、道理と天下を語ることばとしてあったのです。漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあったのです。

思考と文体とは不即不離の関係にある。漢文脈に拠って議論するということ、おのずと「天下国家について議論する文体」を内面化することであった。それは、「漢文こそが、天下国家を論じるにふさわしい文体であり、それがなくては、天下国家を語る枠組み自体が提供されなかつたから」にほかならない。

漢文のもつ精神性が、十八世紀末から十九世紀にかけて日本全国に広まったということは、十九世紀末(一八九八年)に創刊された『中学世界』を考察する本稿にとつては重要な認識の枠組である。というのも、『中学世界』の「青年文壇」があきらかに、十九世紀的な士大夫意識の水脈のうちには属していたということを確認できるからにほかならない。国家の

要務にあたるべき者としての自意識をもつ投書青年の立場からは、国家を顧みない利己的な立身出世主義者は、国家を顧みない文学趣味の青年と同様に非難の対象となるだろう。彼らはいずれも「私欲」にまみれた「個人主義者」なのであって、この意味で、当時の若者のタイプを(あるいは、小説のタイプを)立身出世主義に肯定的か懐疑的かの二項対立で捉える図式は、有効性を欠くといふべきだろう。

また、ここで比較しておきたいのが、『中学世界』の創刊と同じ年の翌月、一八九八(明治三二)年一〇月に、松山から東京に移り、高浜虚子の編集で再スタートを切った雑誌『ホトトギス』である。

ともに投書雑誌として明治三十年代に大きな成長を遂げる二誌であるが、『ホトトギス』のほうは、職業や年齢を問わないきわめて幅広い階層の人々が、このあと写生文と呼ばれる言文一致の平易な文体で日常を写すことによつてひとつのムーブメントを起こす。いつぼう、『中学世界』は、言文一致ではなく、漢文脈的なエトスを内面化した中学生(いうまでもなく、最初から女性も排除されている)という、『ホトトギス』読者と比較するとかなり均質化された読者・投書者層によつて構成されているという点で、両者はきわめて対照的だ。しかも、さらに興味深いことに、さまざまな先行研究が指摘しているように、明治四十年前後の日本近代文学における言文一致文体成立の立役者は『ホトトギス』と、『中学世界』の後身である『文章世界』がその一翼を担った自然主義文学運動ということになっている。両者は、まったく対照的な地点からスタートして、

はからずも同じ地点に逢着したことになるのである。十九世紀末に刊行された『中学世界』は、漢文脈の掉尾を飾りつつ、それを、言文一致による新しい自己表現の水脈へと接続する役割を果たした雑誌だったのである。

五

『中学世界』が創刊された翌々年の明治三十三年満二〇歳になった男子の学歴別構成を見てみると、高等小学校を卒業した者の割合が全体の七・八パーセント、さらに中学校まで卒業した者はわずか〇・四パーセントであった。当時、彼らがいかに選ばれし者たちだったのかが了解される。

なお、明治三十二年の「中学校令」改正では、これまでの「中学校ハ実業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ学校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ為ス所」は、「中学校ハ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」と改められ、実業（職業）教育は実業学校の役割とされ、中学校の教育から切り離された。これによって各地の中学校は、中央に優勝な人材を集める機関としての性格をより一層強めてゆくことになった。そして、雑誌『中学世界』は、時代が生み出した新しい階層「中学生」に即応するかたちで創刊されたのだった。高山樗牛による「創刊の辞」を読んでみよう。

今や中等教育は全国に普及し、既に各府県に設けられたる公私尋常中学校の數、殆ど二百に達し、就学生徒亦八万の上に出づ。而して今年を追うて益々増加せむとす。奎運の隆盛、振古未だ曾て有らざる所、真に盛世の余沢なり。

抑々中等教育は、中等社会以上の國民を養成する所、國家の盛衰、強弱、一に是に懸る。路に教育の任に當るもの、各々其力を職責に尽し、經營多年、教科漸く完く、制度亦備はれりと雖ども、学校課程以外に於て、生徒の良師となり、益友となるべき好雑誌無きは、中等教育の爲に深く遺憾とすべきなり。吾人自ら計らず、茲に本誌を發刊するに到りたるは、是欠陥を補充せむとするの微衷に出づ。

夫れ中等普通の智識を授け、倫理修身の道を明にし、以て少年の品性德行を陶冶するは、中等教育の要務なり。然れども学校授くる所の課程は、尋常一般の事理を超えず。必要欠くべからざること、素より言を疎たずと雖ども、動もすれば乾燥無味にして、兒童の倦厭忌避する所となる。是れ一定の規律、年時に於てする所の教育に於て、往々已むを得ざるなり。是時に當り、若し教科書の傍ら、趣味と、慰藉と、快樂と、実益とを与へ、兼て勉強切磋の志操を奨励するの好伴侶あらば、豈少年の幸福に非ずや。我『中学世界』は、是の如き好伴侶を以て自ら任ずる者なり。（高山林次郎「發刊の辞」、一八九八「明治三二」年九月、『中学世界』一一）

ちなみに、創刊当時の『中学世界』の誌面構成は、「中学世界」（「当今名士の有益なる論説」を掲げる）「文界時評」「史伝地理」「理科算数」「国語漢文」「英語の栞」「隨筆雜纂」「青年文壇」「家庭遊戯」「学界彙報」などバラエティに富んでいて、これは「より文芸誌の色彩の濃い『文庫』よりも中学校の教育カリキュラムに即したものだ^⑤」だった。創刊号には「本誌は言政治渉るも差支なき保證あるものなりされど本来の性質學術雜誌なれば切に其範圍を守り敢て埒外に逸せざらんことを期すことあり、本誌が學術雜誌を名乗りつつも、実質は、政治（的）な雑誌との境界線上に位置づけられる存在であることを自覚していたことが分かる。なお、樗牛「発刊の辞」に見られた階層意識は、以下の引用にも顕著にうかがえよう。「中学は普通教育の完成所なり。之を卒へたる学生は専門の知識こそなければ、一個の紳士として社会に立つことを得べき知徳を備へたるものならざる可らず。尋常小学科を卒へたる人は農夫たり、職工たり、小商人たり、以て社会中等以下の人民たるに適すとせば、尋常中学科を卒へたる人は、紳士として方に中等社会を組織する要素たり、以て国家の要務に当るべきもの也」（久津見息忠「中学生に望む」、一八九九「明治三〇」年五月、『中学世界』）。

付け加えておくと、『中学世界』創刊の年は、中学校進学者のうちで士族が占める割合が初めて三分の一を下回った年でもある。それは、「裏返せば平民、すなわち農業や商業出身者のしめる比率の上昇の過程でもあった。（中略）中等教育全体としてみれば、士族と庶業の時代は間違いな

く終わろうとしていたのである^⑥。学歴による官吏登用制度の定着ともにも、日本におけるメリトクラシーの成立が、明治三十年代のことだといわれるひとつの指標といえようが、ここで、初期『中学世界』の投書がほとんど例外なく漢文書き下し体（普通文）であったことがあらためて注目される。その多数が農業・商業出身者からなる中学生たちは、「国家の要務に当るべき」「紳士」たる自覚のもとに、それに必要な公式文体を内面化し、「中学『世界』」という学歴社会へ参入し、それを運用できない者たちとの間で差別化・卓越化を図る必要があったのである。

福沢諭吉は当初、自国独立の柱として、士族を念頭においていたという。ただし彼は、「士族」とは「必ずしも雙刀を帯して家禄を有したる武家のみ」をいうのではないという。士族とは、福沢にとつて「医者にても、儒者にても、或は町人百姓にても、読書武芸等の一芸に志して天下の事を心頭に掛る者^⑦」、すなわち士人的エトスを内面化した者にほかならなかつた。時代は下つて明治三十年代。「天下の事を心頭に掛る者」は、ようやく、士族出身者だけでなく農業・商業出身者たちによつても構成されるようになった。国家有用の士たることを自認する中学生たちの自意識が、それにふさわしいエトスをみずから進んで身体化しようとしたのであることは容易に想像がつく。

さて、このような『中学世界』というメディアの役割、そして「中学生」という存在に期待されていた理想像からすると、はやくも明治三十年代の半ば、すなわち二十世紀初頭に、立身出世主義について懷疑し、

学歴の階梯に基づく社会システムそのものを相対化しかねないような内面を率直に吐露した投書が寄せられるようになったという事態は、やはりたいへん重要な出来事であったとすべきである。その一例が、本稿の最初の方に紹介した田内壽月「なつかしき故郷」だったわけである。彼らの多くは言文一致体を用いて自己の鬱屈した内面を表出しようとした。それは、当時「普通文」と呼ばれていた漢文書き下し文体では、内的言語のありのままの表出が不自然なものに思えたからにはかならない。

人は何故に此世へ生れて来るものだらうとは随分むつかしい問題で、容易に解釈する事は出来難^(マヤ)からう。自分は何故此世に生れて来たらうとは僕の時々悩まされる問題で、容易に解釈することが出来ない。

(中略) 僕は何処か人の居ない、遠い遠い、深い深い、山の奥か海の底かへ行つて、泣いて泣いて、泣いて泣いて、猶ほ泣いて泣いて、而して、充分出るだけの声で号哭して見たいものだと思ふ。嘸^{まよ}気がさつぱりする事であらうに。(大石観一「たはごと」と、一九〇一「明治三四」年九月、『中学世界』四一二)

さきに「一個人の利益は則國家の利益なり」と記した投書家について触れたが、「國家」を理解しやすいように単純化し所有することで、みずから「主体Ⅱ臣民」たらんとした彼らに対し、反、立身出世型の投書家たちには、「此世」の複雑さにそのまま向かい合おうとする意思を感じる。

こうした姿勢は「軟弱」と呼ばれてしまふわけだが、いわゆる硬派たちの直線的な思考よりは柔軟であるともいえる。もちろん、こうした身振りも紋切型を脱することはできないわけだが(そのひとつの飽和点が「藤頭之感」であることは言うまでもない)、ともあれ彼らは、わが身を惜しみなく譲渡するだけの価値を「此世」に見いだすことができなかった。彼らにとつて「此世」は「容易に解釈することが出来ない」ものであったからである。この二年後、藤村操はそれを「不可解」と言い、華嚴の滝に身を投じることになる。

このようにして『中学世界』は、いわゆる文学青年たちによる投書雑誌へと少しずつ変質を遂げてゆくのである。いまこの投書家は、おのれの内面を「たはごと」と卑小化し、自己を孤立した存在と見立てているが、ここから「青年のアイデンティティの証としての寂しさ」を共有する文学共同体⁽²⁾が成立するまでは、ほぼ一直線の道程である。ただし、おおかた予想がつくように、こうした「軟弱繊麗」な投書文に対する硬派投書家たちからの風当たりは、かなり強硬なものであった⁽³⁾(そもそも、この手の投書が掲載されること自体、数少ないのだが)。ただしはつきり言えるのは、だからといって、言文一致の文体を用いて自己の真情を表出しようとする者がけつして途絶えることはなかったし、彼ら相互の紐帯が堅固なものになるにしたがつて、雑誌もまたそれをまったく無視することができなかつた(できなくなつた)ということである(関肇の調査によれば、明治三六年の段階においては、立身出世主義に懐疑的な反上昇志向的な投

書の方が数字の上で上回るといふ⁽²⁾。

六

『中学世界』『青年文壇』欄は、私たちがごく自然にイメージするような「文学青年」たち同士の親密な作者と読者共同体でも、彼ら相互のいさぎよい切磋琢磨の場所でもなかった。個人的な感情の表白を「個人主義」として切り捨てようとする圧倒的多数の声による抑圧のもとで、それでも、少なくない青年たちが内面を書き綴ることで、国家有用の士であること以外の自己存在のありようを確認しようと試み続けた場であったのである。このように、明治三十年代半ばの『中学世界』とは、いわば、漢文脈（普通文）と言文一致体との葛藤体としてあったわけだが、その葛藤の具体的なありようと、その地平の彼方に文学志向の青年たちが結集する『文章世界』という新たな舞台が派生してくることの意味については別稿を用意したい。

〔注〕

- (1) 十川信介「『自然』の変貌―明治三十五年前後―」（一九八六年八月、『文学』）
 (2) 竹内洋は、明治三十年以前の苦学と以後の苦学とが大きく変化したことについて、次のように指摘している。「明治三〇年代に士族以外の貧しい階層に上京苦学熱がひろがる。ネットワークなしの上京苦学が大量現象として生じる。つまりこの間に苦学の大量現象化という量的変化と、『庇護型』苦学から『裸一貫型』苦学

への質的变化があった」（『立志・苦学・出世―受験生の社会史』、一九九一年二月、講談社現代新書）。

- (3) 井上哲次郎著・中村正直編『勅語衍義』（二八九―「明治二四」年九月）は、「文部省検定済 師範学校中学校教科用書」として長期間にわたって教育現場で使用された、いわば「教育勅語」の公定解説書である。なお、福沢と井上の「一身一家―一国」をめぐる認識の相違は、関口すみ子『国民道徳とジェンダー 福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』（二〇〇七年四月、東京大学出版会）に詳しい。
 (4) 『明治立身出世主義の系譜―『西国立志編』から『帰省』まで』（『近代読者の成立』、一九七三年一月、有精堂）
 (5) 『立志・苦学・出世―受験生の社会史』（注2参照）
 (6) 「『記事論説文例』―銅版作文書の誕生―」（作文する少年たち―『頼才新誌』創刊のころ―）（『漢文脈の近代』、二〇〇五年二月、名古屋大学出版会）。なお、明治期における作文教育の思潮の変容については、佐藤忠男「論争の場としての少年雑誌―『頼才新誌』の担った役割」（『権利としての教育』、一九六八年五月、筑摩書房）も参照。
 (7) 『明治初期の文学思想』上巻（一九六五年三月、春秋社）
 (8) 明治二十―三十年代における、言語芸術としての「文学」概念の推移については、鈴木貞美『日本の「文学」概念』（一九九八年一〇月、作品社）を参照。
 (9) 丸山真男『福沢諭吉の儒教批判』（『戦中と戦後の間』、一九七六年一月、みすず書房）
 (10) ちょうどこの頃、民友社による頼山陽の再評価が行なわれている（森田思軒著

- 徳富蘇峰・山路愛山校定『頼山陽及其時代』、一八九八〔明治三二〕年五月、民友社。この出版の同時代的な意義については、齋藤希史『漢文脈と日本近代』もうひとつのことばの世界』(二〇〇七年二月、NHKブックス)に詳しい。また、明治二十年代に誕生した『新日本之青年』(徳富蘇峰)と、本稿で扱っている中学生投書家たちとの連続と断続についての考察は、今後の課題としたい。
- (11) 齋藤希史『漢文脈と日本近代』もうひとつのことばの世界』(注10参照)
- (12) 注11と同じ。
- (13) 注11と同じ。
- (14) 天野郁夫『学歴の社会史』(二〇〇五年一月、平凡社ライブラリー)
- (15) 紅野謙介「『中学世界』から『文章世界』へ」(『投機としての文学』活字・懸賞・メディア』、二〇〇三年三月、新曜社)
- (16) 明治十六年の新聞紙条例により、政治に関する記事を載せることのできる定期刊行物を発行する場合、保証金(東京では千円)を納めなければならなかった。ちなみに、『中学世界』創刊と同年の『文庫』には「本誌は、出版法に拠りて発行する文学雑誌」という自己規定が見られ、さらに「記事政治に渉るもの、若くは風俗を壊乱するの恐あるものは、一切排斥す」とある(「寄稿規則」)。
- (17) 注14と同じ。
- (18) 『分権論』(一八七七年「明治一〇」年一月)
- (19) 「懐疑の時代」(田山花袋「文界時評」、一八九九〔明治三二〕年二月、『中学世界』二二二八)という認識は、早くから見ることが出来る。問題は、それをこの雑誌が肯定的に扱うのか否定的に扱うのか、である。
- (20) 飯田祐子「彼らの独歩―『文章世界』における「寂しさ」の瀰漫―」(一九九八年一月、『日本近代文学』)
- (21) 「壮士」たちによる悲憤慷慨型の漢文脈、および文学愛好家たちの「小説」、この両者をめぐる態度の偏差によって、明治二十年代の青年たち内部での差異化がなされたことについては、木村直恵『「青年」の誕生 明治日本における政治的実践の転換』(一九九八年二月、新曜社)に詳しい。なお、明治二十年代半ばに非政治化した若者たちと、国家有用の士としての自意識を過剰なまでに保持した明治二十年代の中学生との間の連続・断続については、今後の検討課題である。
- (22) 「(立志) 言説の変容―国木田独歩「非凡なる凡人」の受容空間」(『新聞小説の時代』メディア・読者・メロドラマ』、二〇〇七年二月、新曜社)
- 〔付記〕 本稿は、日本近代文学会東海支部第二十五回研究会(二〇〇九年六月六日、南山大学)での口頭発表、「文章II世界」を生きた中学生たち―明治三十年代の「書くこと」をめぐる情況―の一部をもとにしたものである。